

報道の立場から見た瀬戸内海の過去、現在、未来

泉川誉夫（四国新聞社執行役員広報局長）

[本城先生]

それでは最後の講演になりますけれども、泉川誉夫先生にお願いしたいと思います。泉川先生には「報道の立場から見た瀬戸内海の過去、現在、未来」というテーマでお話をいただきしたいと思います。

[泉川先生]

皆様、こんにちは。四国新聞社の泉川と申します。今、先生と言われました、ちょっとドギマギしました。

今日はこのようなアカデミックな場でお話をする機会をいただき、本当にありがとうございます。

実は、多田先生からご依頼があった時、「私ではちょっと苦しいな」と思ったのですが、多田先生にはずっと取材でお世話になってきたものですから、断りきれなかったというのが実情でございます。

ところで、私はすごいアナログ人間なので、プロジェクターを使いません。お手元に一枚のレジメともいえないような資料を

お配りしていると思いますが、その資料に沿ってお話しをしたいと思います。でも、この資料を見ても、「何のことか、よく分からないだろうな」とありますが、脱線しつつも資料に沿って、できるだけコンパクトにお話しをしたいと思います。

本題に入る前に、先ほどの佐野先生のお話ですが、すごく興味深く聞かせていただきま

香川大学瀬戸内圏研究センター特別シンポジウム

2015/11/20

報道の立場から見た瀬戸内海の過去、現在、未来

四国新聞社 泉川誉夫

【うたた今昔の感】

▽外国人だらけの直島

▽海パンが汚れない

【二つの連載から】

① 連鎖の崩壊（1999年）

- ・たった一人の定点観測
- ・研究成果は宝の持ち腐れ？

② 島びと20世紀（2000年）

- ・豊島と直島、100年の奇しき因縁

【瀬戸内海報道の現状と課題】

▽環境問題はフェードアウトか（報道も組織から人へ）

- ・瀬戸内海環境保全特別措置法・環境基本計画の改正
- ・国立公園80周年で何ができたか

▽遠ざかった海を視界にどう取り戻す

- ・一度しみついたイメージの怖さ

【未来へ 二つの素材】

- ① 里海
- ② 瀬戸内国際芸術祭

*瀬戸内全誌→瀬戸内海を総合的にとらえるチャンスだが～

した。これには、ちょっと個人的な事情がありまして、私はスーパーきむらの愛用者といえますか、休みが取れた土、日曜日には、たいていスーパーきむらに魚を買いに行きます。

実は、これもきわめてプライベートなことですが、スーパーきむらさんは牟礼町がもともと発祥で、小さなパママストアーからスタートされたお店です。私も高松市牟礼町で生まれ育ったものですから、ずいぶん前から知っています。また、社長の息子さんが私の息子と同級生というご縁もあって、よく利用させていただいています。私が魚を大好きで、私の3人の子供達も魚を大好きになってくれました。

これもきわめてプライベートなことですが、私は14年前に妻を病気で亡くしました。まだ小さい3人の子供を育てないといけないという状況の中で、食べるものだけは「きちっとしたものを食べさせたいな」と言うことで、毎朝頑張ってご飯を作り、そこに魚を出すということを14年間、何とか続けてきました。これができたのもきむらさんのおかげでもあります。それで子供も魚を好きになってくれて何とか育っています。

私は「魚が好きなのに何でこんな体型なのかな」と思うことがございます。これは「他にもいっぱいいろいろなものを食べたり、アルコールを入れたりしているからかな」というふうに思っています。すみません。いきなり脱線してしまいました。

お手元に先ほど申し上げました雑駁な紙をお配りしていますけれども、最初に「うたた今昔の感」と書いています。実は私、今年還暦になったのですけれども、東京にいた学生の4年間以外、60年間ずっと瀬戸内海の傍で暮らしてきました。タイトルに報道の立場からと書いていますけれども、どちらかと言うと私が見てきた瀬戸内海ということになってしましますが、先般、この15日の日曜日でしたか、東京からお客さんが来られて「ぜひ直島を見たい」と言うので、お連れしました。久しぶりの直島は、すごい数の欧米の方、それから中国、台湾の団体の方も大勢来られていました。「いったいここは香川県なのだろうか」と錯覚するような状況でした。皆様はよくご存じと思いますが、私は久しぶりだったものですから、何か別世界に来たような気分になりました。

あとでお話をしますけれども、私が瀬戸内海の島を取材していた頃は、15、6年前です。そのあと直島に地中美術館ができて、瀬戸内国際芸術祭が始まって、「状況が一変しているな」と感じています。

それから、もう一つは今昔の感の下側ですが、海パンが汚れないと書いていますが、私が子供の頃の瀬戸内海は結構汚れていました。白い海パンで海水浴に行くと、なんとなく茶色に染まるというように、いろいろなものが砂浜に漂着していて、汚い海というようなイメージが、ずっと付きまとっていたような気がします。今年の夏、また久しぶりに瀬戸内海の庵治沖に海水浴に行きました。その時「本当にきれいになっているな」と改めて実感しました。

さっきの魚のことですが、私が大学1年生の時に東京で飲み会があり、何となく魚の話になったわけですね。その時、瀬戸内海の魚をずっと食べてきたので、「東京の魚がまずい」とはっきり言ったら、一緒に飲んでいた北関東の出身の何人かが「瀬戸内海は赤潮まみれ

じゃあねえか」と、あそこは言葉が悪いのです。ごめんなさい、北関東出身の方がおられたら。「赤潮まみれじゃあねえか」みたいな「そんな魚食えるか」と言うことでちょっとつかみ合いのけんかになったことがあります。そのことが頭の中に滲みついでいて、記者になってから「どこかで瀬戸内海の事をいろいろ取材してみたい」というような気持ちが頭の片隅にずっとありました。

そうしているうちに、新聞記者として本格的に瀬戸内海と向き合ったのが、もう 10 数年前のことです。1999 年、ここに書いていますけれども、「連鎖の崩壊」というタイトルで 1 年間連載をしました。翌年 2000 年には「島びと 20 世紀」というタイトルで、これも 1 年間連載をしました。その「連鎖の崩壊」という本は連載の翌年 2000 年、忘れないうちに 1 冊の本にまとめて 1,500 円で売り出したものです。

ところが、あまり買ってくれなくて、今も在庫があります。少しですが、今日、10 冊ほどお持ちしましたので、ゴミになるかも分かりませんが、もし「持って帰ってもええよ」と言う方がいらしたら、無料で差し上げます。ただ、書いた時から言えば、もう 16 年前になりますので、かなりデータなどの状況が変わっていますが、もしよろしかったらお持ちください。

実は「連鎖の崩壊」を取材する中で、私の大好きなイカナゴやサワラが「あんまり食べられんようになったなあ」と言われるようになりました。10 数年前ですよ。いつも魚屋さんにサワラをさばいてもらって押し鮪に載せる、子供の頃からの食文化なのですけれども、片身で 2 万円とかという時があって、「一体、どうなっているのやろうか」というのが出発点です。「どうもイカナゴも獲れてない」とかいうことを聞き、それは「海砂をいっぱい取っているからじゃあないか」ということを聞いて、「実態はどうなっているのやろうか」ということで、「連鎖の崩壊」というタイトルですけど、まずは「もういい加減に海砂の採取をやめましょう」というある種のキャンペーンのようなことで連載を始めました。

この時、いろいろな脅迫まがいの電話を受けて、身の危険を感じたことがありました。それをなんとかやり終えて、そのあとは埋め立ての問題や生物多様性の問題などについて書き、1 年間まとめたのですが、実はその取材の過程で少し気になった事がありました。実は、今年の 3 月に刊行された瀬戸協（瀬戸内海環境保全協会）の「瀬戸内海」という本の原稿を書いてほしいとのご依頼があって、そこにいくつか書いているのですが、その取材の中で、意外だと思ったのが、一つは長期間に亘って瀬戸内海のある地点、場所を定点観測している方が少ないという事でした。

私がお話を伺えたのが、広島県呉の藤岡さんという方でしたけれども、ずっと 40 年間呉の浅海域で生物調査をされている方で、この方のお話がずいぶん参考になったというか、連載の中でも取り上げをさせていただきました。

もう一つはその下に書いていますけれども、「研究成果は宝の持ち腐れ？」ということですよ。この取材でずっと沿岸域、大学を中心に国の研究機関やいろいろなところでお話を伺ったのですけれども、意外にもいろいろな調査をされていました。それは私が不勉強で知

らなかっただけという事になるかも知れませんが、私から見れば本当に貴重ないろいろな調査データがありました。そこで、先生方に「これ発表しましたか」とお聞きしたら「いや、発表はしていない」とおっしゃるのです。「では、どうされたのですか」と聞きますと、「研究紀要の中に入っているよ」と言うような感じで、ごそごとと研究紀要を出してこられました。「それではほとんどオープンになってないでしょう」と言うような話をしました。

その時、すごく惜しいなあと思ったのは、「そういうデータ類というか、研究の成果をもう少し積極的に外に出されたら良かったのになあ」という事でした。私が気付いた時は既に調査時点から何年か経っていて、タイムリーなものとして使い難いということがありました。でも、今では、そういう状況は既に変わっていて、どんどん積極的に外部に公表されているのだらうと思っていますが、10数年前はまだまだそのように、ある種クローズドの中で情報が眠っているというように感じていました。

それから、「連鎖の崩壊」の翌年、2000年に「島びと 20世紀」を1年間連載しましたが、これは基本的にタイトルどおり、「瀬戸内海の島で生きてきた人達にとって 20世紀って、どういう世紀だったのだろうか」というようなことをいろいろ書いたものです。

その中で、「豊島と直島」というタイトルで10数回連載をしたものがあります。資料に「100年の奇しき因縁」と書いていますけれども、これはすごく興味深かったというか、ちょうど産廃のことがあった時期です。実は、豊島に産業廃棄物が不法投棄されて、構図としては都会のごみが離島に持ち込まれて、離島がいろいろな意味でしわ寄せを受けているということだったのですが、いろいろ調べていきますと、その構図自体が取材で補強されたのでした。

今の三菱マテリアル、三菱直島精錬所ですが、直島に精錬所ができたのは、今からちょうど100年ぐらい前の1917年、大正6年です。当初、三菱は豊島に立地をしたいということで、豊島に申し入れをしたのですが、当時、豊島は豊島石の石材業が盛んで、豊かな水に恵まれ農業も営まれている島だったものですから、既にいろいろ問題になっている亜硫酸ガスのような公害を出す恐れのある製錬所はとて受け入れられないということで拒否をしました。そこで、三菱はやむなく隣の直島に立地の申し入れをしたのです。

当時、直島は非常に困窮し疲弊している村だったので、村長以下、涙を飲んで精錬所をやむなく受け入れるという決断をしました。実はそのあと、ずいぶん時間が経ってからです。豊島の産廃が判明して、そのゴミを今度は直島の三菱マテリアルで処理をすることになりました。

なんとなくその2つの島の因縁のようなものを感じて延々と書いたのですけれども、どちらにしても瀬戸内海の島がそのような工業化、近代化の過程で都市部のしわ寄せを受けるという軌跡をたどってきたということを書いて、自分で言うのもなんですが、それはそれで面白い。面白いと言うと語弊があると思いますが、極めて興味深い事象でした。

「島びと 20世紀」の連載については、私共四国新聞社のホームページのトップページに連載一覧というところがありますので、そこをクリックしていただければ、全て読めるよ

うになっています。もしご興味があれば、読んでいただけたらと思います。

次に「瀬戸内海報道の現状と課題」として、しかつめらしいタイトルの下に「環境問題はフェードアウトか」と書いています。私は編集を離れて3年になるのですが、少し編集と距離を置いて見ていて、すごく不安というか、心配なのが瀬戸内海の問題です。

私は瀬戸内海についての報道量が減ってきているということを感じています。一つには水質の問題とかがかなり解決されてきていることがあります。報道というのは何か事が起きると、それについて食いついて行くというようなものなので、そういう意味から、今、瀬戸内海は環境で言えば風の時代であり、むしろ幸せなことなのかも知れません。

ここに書いていますように、今年は瀬戸内海環境保全特別措置法に基づく瀬戸内海環境保全基本計画の改正がありました。私は新聞でしか知りませんが、その扱いが「どうも地味だったなあ」というように感じています。私は今回の改正の意味と言うものをどこまで理解できているか、自信がないのですが、それなりの転換があったと思っています。本来、報道機関というものはそれをきちっと押さえて、このことを多角的に紹介していくべきであったのではないかと思います。けれども、残念ながらそうはなっていません。少なくとも私共四国新聞は「そこはできていなかったなあ」と思います。

それを今、反省を込めてということになりますが、その下に「国立公園80周年」とあります。実は去年、私はこれで特集を2回ほどやりました。本当は広告の人間がしてはいけないのですが、誰も書いてくれないので自分で取材をして書いてしまいました。これは報道の展開というよりも、ある意味ですごくチャンスだったと思うのですね。瀬戸内海について、きちっと考えるというのは、このような節目の時でなければ、人間ってなかなか難しいのですね。

行政の方もおられるので、ちょっと申し上げ難いのですが、それぞれの自治体も小さなイベント等をいろいろやりましたが、「結構、縦割りで行われたなあ」というような気がしています。私は「もう少し瀬戸内海の問題の事もきちっと踏まえて、皆で連携して何かをやれたのではないか」というように感じています。そのことをしっかりと報道しなかった報道機関の問題ではありますが、このことをすごく感じています。

次に「遠ざかった海を視界にどう取り戻すか」ということですが、これも「瀬戸内海」に書いたものです。香川県が一昨年に県民の意識調査をされて、私もちょっと驚いた結果が出ていました。瀬戸内海のことについて幾つか設問があり、その一つに「子供の頃と比べて海はどうか」という問いかけに対して、「海が汚くなった」と答えた県民が33%もいたということです。これが何を意味しているのか分かりませんが、私は少なくとも「えっ」と思いました。きれいになったというのはわずか7%でした。冒頭に少し触れましたけれども、私は実感として「すごくきれいになったな」と思っていました。少なくとも見た目にはきれいになっているのに、3人に1人が「汚くなった」と答えたのは、「いったい何なのかな」と不思議に思いました。

それはたぶんイメージだけが染み付いているのでしょう。きちっと海を見ていれば、「汚くなった」という答えは出難いと思うのですけれども、今、海がどんどん遠ざかっていて、「一度しみついたイメージというものは怖いなあ、なかなか払拭されないのだなあ」というような気がしています。

もう一つは、意識調査で「海とのふれあいやレジャーの機会について」という設問がありましたが、29%が「全くなし」と答えており、海とも完全に疎遠になっているということです。それから33%は「数年に1回程度」、これ「本当に接触しているのかなあ」というぐらいの頻度ですけれども、6割を超える人が、海が遠い存在になっているというようなことに驚きながらその数値を受け止めました。私はこのことが、「いろいろな問題をこれから生起させる恐れがあるな」と思っています。やはり、「もう少し身近に瀬戸内海というものを感じてもらうような手立てを、しっかりと取って行かないといけないな」と思いますし、そのことは報道機関も心してかからないといけないと思っています。

一番下の「未来へ 2つの素材」というタイトルの下に「里海」と「瀬戸内国際芸術祭」と書いていますけれども、海本来、瀬戸内海本来の価値の創出というか、見直しといえば、私は里海だと思っています。里海は既に市民権を得ており、いろいろな施策が始まっており、里海が一つのキーワードだろうと思います。また、瀬戸内海を観光面あるいは地域活性化の観点から言うと、瀬戸内国際芸術祭が大きなテコだと思っています。

実は、里海について思い出があります。「連鎖の崩壊」の取材で1999年に九州大学の柳先生をお尋ねして、いろいろお話を伺いました。この時、初めてこの里海という言葉を知りました。私にとってすごく新鮮で、連載の中ですぐに紹介しました。たぶん里海という言葉が走りの頃だったのではないかと思います。その時は「まだ里海の概念というか、理念がやや曖昧かなあ」と柳先生のお話を伺って思いましたけれども、今や本当に国際語みたいなことになっており、私はこのことをすごく嬉しく思っています。

私は良く知りませんが、「瀬戸内全誌」というものを県が準備しており、大学も関わっておられると思います。これは瀬戸内海を総合的に見て行くチャンスになるだろうと思います。しかし、あまり情報が伝わって来ません。「関係者だけで作るのではなく、これからはぜひ広く県民からもいろいろな声を聞いて作って行くというようにして欲しいなあ」と思います。

いずれにしても、瀬戸内海の魅力というものは非常に多面的だと思うのですが、メディアはそのことをきっちりと伝えて行く責務があると思っています。さっき申し上げたように少し心配なのは「ややそういうものが弱くなっているのかな」、「メディアの足腰がかなり弱くなっているな」という懸念があります。実は、私が心配しているのは、かつてメディアは情報のある種独占的に持っていて、例えば行政を取材する、大学を取材する、研究者を取材するというように関係者を取材することによって情報が一元的に得られて、それを発信して行く。一般の方よりもはるかに早く詳しく情報を得ることができたのですが、今、どちらかと言うと、先にWebに情報がいっぱい氾濫・出回っていて、その確認に追い

回されているというような状況になっています。そういう中で、例えば瀬戸内海のことを少し鳥の目のように、上からきちっと総合的に見て、「こういうことが必要ではないか」というような提言をしたり、「これはおかしいのではないか」という指摘をしたりすることがなかなかできなくなっている気がします。

それと、もう少し経営的なことかというと、メディアの中でも特に新聞は、どこも非常に厳しい状況です。人口減もありますけれども、購読部数が少しずつ減ってきていて、広告収入も落ちてきてという中で、新聞社も経営をして行かないといけないので、記者の数がだいぶ減らされてきているように感じます。

その「少なくなった記者が何をやるか」と言うと、どうしても日々のいろいろな出来事を追いかけがちになる。それで手一杯みたいなことですね。瀬戸内海について言うと、やはり少し余裕がないと難しい。もちろん何かインシデントがあれば、それを追っかけて書きますけれども、もう少し何かゆとりを持って瀬戸内海の全体像を見て行こうとか、その全体像を見て行く上で、この部分が少しおかしいのではないかと言うようなことは、記者自身にある種の精神的なゆとりがなければ、なかなかできないと思います。

程度の差はあると思いますが、瀬戸内沿岸の新聞社には、その状況が結構共通しているような気がします。一番熱心なのが中国新聞さんで、伝統的にずっといろいろな形で関わってきています。しかし中国新聞さん以外は惨たんたる状況です。そういうことで、「瀬戸内海というものをテーマとして、しっかりと展開をしていくということがやり難いなあ」というような状況です。

ということで非常に雑駁な話でしたが、まったく個人的感想をだらだらと喋ってしまいました。タイトルの「報道の立場から見た過去、現在、未来」は羊頭狗肉ようとうくにくだったかもしれませんね。以上をもって話を終わりたいと思います。

ありがとうございました。

[本城先生]

先生が使えないならば、局長と言います。泉川局長、ありがとうございました。報道の立場から見てお話をいただきましたけれども、どうぞ、ご質問等がございましたらお願いします。

記者が少なくなってくると、やはり俯瞰ふかん的に見るような記事をゆっくりと書く時間はもう無くなってきている。一方、事件は同じぐらいの数で起こるというようなことでしょうか。

[泉川先生]

その部分の補足ですけれども、要するにメディアは組織として瀬戸内海というテーマに立ち向かっていくということが難しくなっていて、まさに先ほどの話と矛盾するかもしれ

ませんが、いかにその隙間をぬって、記者個人として瀬戸内海をずっとウォッチして行きたいという動機を作るかどうか、すごく大事なのです。

関係者の皆様にこんなことを申し上げるのは手前勝手なのですけれども、そういう関心を持ちそうな記者というか、関心を持っている記者をぜひ育てていただきたい。育てていただくとありがたい。そのためには、記者にとって何よりのごちそうが情報なので、「こんな話が進んでいるよ」とか、「こんな面白い話があるよ」とか、耳打ちを何回か繰り返していただくとありがたい。そうすると、ずっと瀬戸内海に関わって行こうという記者が必ず育つと思います。手前勝手ですけど、その点をぜひよろしくお願いします。

[本城先生]

ご質問ございませんでしょうか。

[一見先生]

単純な質問なのですが、僕は学生が終わって、その頃からバイブルのようにして拝見させてもらっている「連鎖の崩壊」を連載されている時とか、出たばかりの時に、海砂利業者からいろいろな批評・反響があったと思うのですが、漁業者や一般の方から反響のようなものがありましたか。

[泉川先生]

先ほどちらっと申し上げたのですが、残念ながら一般の方からの反響はありませんでした。そこまで関心を持っていていなかったというのが、正直なところですね。

既に海砂で既得権益を持っている人からは、匿名でいろいろな脅迫の電話がありました。「今から刺しに行くぞ」と言われ、「来たらええがな」みたいな感じでやり取りをしましたけれども、誰も一度も来たわけではありません。

私共の書く内容がそのまま採取禁止に繋がったというのではなくて、採取禁止の大きな流れの中で書いたのです。実は「その採取禁止に至ったということ自体も一般の方がどの程度関心を持っていてくれたのかな」と言うのが、今でも良く分からないですね。そのことで一般の方からメールが来たり、電話が入ったりすることは、それほどはなかったように思います。

個人的な関心事からイカナゴやタイなど生き物のことを書いたりすると、人間と食物連鎖で繋がっているのも、結構いろいろな反響があるのですが、海砂、コンクリート骨材みたいなことには、私共が思っていたほど一般の方からの反響がありませんでした。どちらかというと関係者の反響の方がすごかったのです。

[本城先生]

ちょっと補足いたします。私はある県の海砂の委員をしています、やはり海砂の方側

から漁業関係の方へと補償金が回っているのですね。そうなると漁業者側から漁業への影響の話をするのはタブーになっているように思います。私は水産の立場で委員になっているのですが、「そのことに付いてはできるだけ触れてくれるな」と言われることがあるのですね。「それじゃあ、委員として何になるのだ」と思っているのですが、砂利を洗った後の細かい粒子が広がる範囲などのシミュレーションをお願いしたりしています。私にとって非常に忸怩たる思いが今も続いています。

ですから砂の取りすぎというものに対して、その県に対しては、現在、何パーセント採取しているのかということから、私は規制を投げかけていこうかと思っています。ただし、この前までは採取量は埋蔵量の5%程度だということでした。そのため、もう少し具体的に詰め切れなところがあるのです。海砂採取の件は漁業関係への補償と低い採取量ということで、なかなか厄介です。

[泉川先生]

実はその海砂のことで言いますと、私共の反省は、「とにかく海砂の採取はあかんよね」と言うことで、メディアにありがちな、ある種のデフォルメで書いていってしまうのですね。「元凶は海砂の採取やで」みたいに。

問題は海砂採取が禁止になって以降、「じゃあ、きちっと採取を止めたことで底質環境がどうなっているのか」とか、「水質への影響がどうだったのか」とかいうことを、ほとんどフォローしないまま今日に至っていることです。これはメディアの悪い癖なのです。その時は盛んに書くのですが、その後のフォローがきちんとできていない。瀬戸内海を捉える時には、やはり「ずっとウオッチを続けるということが大事な」と私は思っています。そのために、先ほど申し上げたような記者を皆様にも育てていただけるようお願いしているのです。

[本城先生]

呉の方ではワンポイントですけども、生物調査がずっと続いていますね。今は湯浅さんなんかが進めておられると思いますけれども。あのように変化を見ていると生物の回復も見えてくるし、すごいなと思います。どうぞ室井先生。

[室井先生]

私も「連鎖の崩壊」の読者の一人なのですが、本当にいろいろと考えさせられることが多い本でした。離島の調査とかをやっていて、いろいろな人に聞き取りをしたりしている時に思ったのですが、海砂を採取するというのは良くないということが誰にも分かる話であっても、そうせざるを得なかったという部分があったというようにも言えますね。

あれってというのは、航路の浚渫とか埋め立ての土砂とかある種の公共事業として、それが必要とされていて、初めのうちは漁業者も漁獲に影響があるから、そのようなものに反

対するのだけでも、「漁業補償みたいなものによって、だんだん考えが変わっていったという部分が大きかったのではないのかな」というように思います。

また、その中でいろいろ既得権益が生まれて、漁協とかがよろしくない方向に行ったように思いますが、問題の構想自体はかなり複雑であったと思うのですね。だから、海砂を大量に採取すると生態系とかに破滅的な影響を及ぼすことはよく分かるのだけど、それだけでは、やはりなにか十分でなく、特に、それに関わった人達のことを考えると、「もう少し事情が複雑で、それだけでは十分ではないのかなあ」と思います。

「どのように評価して、誰に何を伝えたいのかなどが難しいなあ」と思うのですが、そこらへんについて、取材されて記事を書くときに悩まれたことがありますか。

[泉川先生]

それはかなり悩みました。でもやはり、さっきの話のようにどこか一面で切り取らないと、あれもこれも「こういう事情もあるよね」、「ああいう事情もあるよね」と言ってしまうと、結局、何も書いたことにならないというか、もしかしたらそれで良いのかもしれないのですが、実はことが動かせないということもあって、どこかをデフォルメしてしまうのですね。これについてはいろいろなお叱りもいただきました。

今、こんなことを申し上げて良いのか分からないのですが、私がすごく反省しているのは、豊島の方が「海砂の採取料をいただいていた」ということを、私は一面のトップにどんと書いてしまいました。「それはおかしいでしょう。豊島の方が瀬戸内海の美しい海とか、生態系の保全というようなことをスローガンとして掲げておられる一方で、海砂の採取を許してお金をいただくというのは好ましくないでしょう」ということで、どんと書いてしまいました。その結果、全国からクレームというか、いろいろなお叱りの電話とメールをいただき、「君はどっちに立つてるのか」みたいなことで叱られました。

確かにある種一面だけで見ると、すごく簡単なことなのですが、本当はいろいろな角度からものを見ないといけないのです。「何とか事態を改善したい」とかいう気持ちがどうしても先に立ち、やや偏ったというか、一点だけをデフォルメするような書き方になってしまいがちなのです。私も現にそれをしてしまいました。全くお答えになっていないと思うのですが、私自身、いろいろなことを思い返しながらお話をさせていただきました。

[本城先生]

ありがとうございました。

良い時間になってきております。それでは、今から総合論議に移りたいと思います。